

セイレーン

栗本 薫



セイレーン 栗本

早川書房

検印廃止

セイレーン

昭和五十五年六月十日 印刷
昭和五十五年六月十五日 発行

定価 一二〇〇円

著者 栗本 薫
くりもと かおる

発行者 早川 清

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇〇一

東京都千代田区神田多町三ノ二

電話 東京 (三五四) 一五二 (代)

振替番号 東京・六四七九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

セイレーン

目次

セイレーン……………五

Run with the Wolf ……………三

解説／小松左京……………二五

セイレーン

二五八六年十月十五日

高がはじめて《彼女》に出会ったとき、彼は養成所をまだほんとうに卒業したばかりの少年だった。

それはアルファ・ケンタウリへの、ごく短い航行でしかなかったはずである。もしそのことさえなかったならば、高はその航行を、すでに養成期間に何度でも行き来していることでもあり、あっさりと忘れ去っていただろう。

だが、《ケルペロス》がネプチューンの軌道をはなれて、いくらかせぬうちに、それは訪れてきたのだった……

「あんた、魔女って奴を信じるか？」

ささやくような声だった。思わず、高は首をねじまげて、レノックスの顔を見た。

「そんな目で見ないでくれ。頭がおかしくなったわけじゃない」

ヴェテランの二等宙航士は厭な顔をしている。

「真面目に答えてくれないか」

「ええ——でも……」

「答えてくれないか。あんたはたしか日本出身だな。あんたの郷里には、そういう伝承はないのか。魔にとりつかれた女、っていう……」

「ないことは、ないですが……」

高はためらいながら答えた。

「もちろん、僕は別に古典を専攻したわけじゃないし……」

「そんなことを、ききたいわけじゃないんだよ！」

ジョン・レノックスは無性に苛立ったようすで、制御盤から手をあげた。

「大丈夫ですか」

「平気だ、もう自動操縦に切りかわってる。それより、云ってくれ。魔女って奴は、いるのか、いないのか」

「そんなこと——僕にはわかりませんよ。僕はいないと思います」

「信じないか——なら、話してもしかたがない」

高は、眉をひそめて、先輩を見つめた。

目のまえのスクリーンは、茫漠とひろがる宇宙空間をうつし出している。まだ亜空間航行に入るには間がある、平穏な道のみである。

レノックスはしばらく怒ったように黙りこくっていたが、しかしほんとうは、話しはじめたくてしかたがないのだった。高は先輩宙航士の眉をしかめた顔をよこ目で眺め、でもどうしてですか、

と水をむけてみた。

「——どうせ、あんたは信じないんだろうが」

「わかりませんよ。ほんとに、わからないんですから」

「坊やは、若いからな。——宇宙では、どんなことでも、起こるもんだよ」

「その——魔女にあつたんですか。レノックスさんは？」

高はなからかう口調できいた。

「あるね」

レノックスはいたって生真面目だ。

「どんな姿をしてるんです？ 長い髪をして、おいでおいでをするんですか？」

つい、高はにやにやしてしまった。とたんに、レノックスは、不機嫌になった。

「やっぱり信じてないんだな」

「ごめんなさい。——からかうつもりじゃなかったんです。ただあんまり、非現実的だから、宇宙の魔女、なんて……」

それにジョークにしたって古くさすぎる。そう秘かにつぶやいた高の心の内を、まるでみすかしたように、

「いいかい、坊や。べつにおれは、長い髪の女が星の海にふわふわ漂いながらおいでおいでをする、と船がそっちへ吸いよせられる、なんてことを云ってるんじゃないんだぜ」

レノックスは鋭く云った。

「おれがそいつに会ったのか、会ってないのかさえ、結局のところははっきりしねえんだよ」

「どんなふうなんです、その——魔女、って」

「お前の思ってるようなもんじゃないんだ」

レノックスはくりかえした。

「あんたは知らんだろうね。おれはこの会社に入るまで、ずっと貨物船のお守りをしてたわけじゃない。この前までS・Rにいたんだ」

「そうだったんですか。ぼくはまた……」

「聞けよ。それでおれはいろいろひどい事故も見てるんだが、その中に、覚えてるかどうかわからんが《アルゴ12》の奴があったのさ。豪華客船が流星雨にやられて、宇宙のタイタニック事件と云われたやつだ。あの事故で観光団体のじいさま、婆さまが、二千人がとこ、死んだ」

「……」

「おれはそいつの遺体収容に出動したわけさ。もちろん、生存者なんかいるわけはない、助かりっこないんだ。はなから、遺体収容だけの——気分のいい仕事じゃない。船内はぼこぼこ、大穴があいてて、はらわたが天井にへばりつき、ヘルメットの中で頭がどろどろになってるんだ。——滅入りながらそいつをかきあつめていたとき、おれは、歌声をきいた」

「歌？」

「歌なんだ。女が小さいいい声で歌を歌ってるんだ。何語だかわからない、もちろん、きいたこともない。よくとおる、可憐な——いつまでもじつときいていたい、そんな気にさせる声だった。おれはあわてた。生存者がいる！ どっかのエアロックにでも運よくはまりこんで助かったかってんで、あわてて船内じゅうをかけまわった。ところがね」

「……」

「生存者なんかいなかったのさ。どこにも、どんなに探しても。——死体はもとよりばらばらだが、

しかし結局曳航して帰って、何とか乗ってた二千二百人全員の棺桶を作ったからね。そいっただけはたしかに云える。誰もあの穴だらけの豪華船の中で生きちゃいなかった。墓石みたいに死んでたよ。そして、くやしいじゃないか。そのときのおれのあわてようを見てレスキューの同僚が一体何が起こったんだというんだ。おれのほかに、だれひとり、その歌をきいてる人間がいやしなかったんだよ」

「……」

「おれはさんざんからかわれ、空耳だの、スピーカーの混線だのあれこれ云われた。だが、おれは、先祖が一人かふたり、ミュージシャンだったぐらいでね。耳はいい。決して、空耳をきくタイプじゃない、夢想家ってわけでもないしね。どうだい、あんたは、説明できるか。おれは宇宙の魔女に、会ったのか、会わないのか？」

「それは魔女というよりは、幽霊みたいですね」

高はくすくす笑った。笑えばレノックスが気をわるくするとは思ったが、何か、笑いのめさずにはいられないような気持になっていたのだ。

「へえ。お前さんは、魔女は信じないが、幽霊は信じるのか」

「ぼくのくには、魔女狩りはしませんでしたからね。でも幽霊とは近しいんです。云いつたえは数えきれないし、父祖の霊ってものも入れれば、あのせまい島国に、無慮何億の幽霊がうごめいてるってことになりますからね」

「なるほどね」

レノックスは面白くなさそうに髭をさぐったが、ふと、思い出したように云った。

「ところで、知ってるかね。おれは、あんたのくへの血が、十六分の一、入っているんだぜ」

「日本ですか？」

「そうなんだよ。おれのひいじいさんの嫁さんが——早い話がひいばあさんが、日本出身だったのさ。おまけに、あんたはたしか桜井高たかつていうんだな」

「そうですよ」

「おれのひいばあさんも、実は桜井というんだそうだ。チェリーブロッサムだときいて、ずいぶんと風流だと思ったんではっきり覚えてる。案外こいつは血がつながってるかもしれない——と、あんたがこんどのパートナーだっていわれたときに思ってたんだがね」

「本当ですか。——桜井って、そうありふれた名前ってわけじゃないんですよ。まあそう珍しいほどもないけど——じゃ、もしかしたら、ほんとうに縁つづきかもしれないね。——下においてから、調べてみましょうよ」

「いいさ、何も。——ただ、そのときの仲間ってやつらは誰も、他に少しでもアジア系の奴はいなかったのさ。だから、おれは、日本人のあんたなら、どう思うかと思ったんだが——しかしね」

「ええ」

「それからたしかにもう六年はたってるんだが、おれはいまだにあの歌の一節を覚えてるんだ。耳についてはなれない。またききたいと思う。——一度きいただけの、意味もわからん歌がね。あの声も、もう一度きけば絶対にわかる。時々、おれは思うね。いったいあの声で歌ってたのはどんな女だったんだろう、魔女でいいから一回だけみたい——とね。……おい、そろそろ入るぞ」

「はい！」

高は緊張した。話はそのまま途絶えた。

亜空間に入る瞬間を、高はいつもなぜか好きだった。

それは高の適性表の中で、たぶん高がパイロットになるためにもっとも大きかったはずのものだ。高はゆったりとG・シートに身を沈め、目の中でくりひろげられる色彩の乱舞を待ちうける。それを最悪のトリップというものもあるが、高は、その狂った夢のような混沌をなぜか好きだった。

おだやかな平常の唸りをあげていた機関類が、ゆっくりとその音をかえ、レノックスはあわただしく計器類にさいごの点検の目を走らせる。

「おれはね、坊や！」

いそいでシート・ベルトの具合いを直しながら彼は声をはりあげた。

「何です！」

「いつもこの瞬間思うんだよ、あ、ちに行ったきり、帰れなくなったら、いったいどうなんだろう——とさ！」

からだが激しくうしろにおしつけられたかと思うとふわっと浮き、五色の糸にからめとられるような混乱が襲ってきた。ゆっくりとからだの力をぬいて、身をゆだねようとしたとき、高は、見た。

《彼女》がそこにいた。

すべてがそのかたちを保っていることもできぬ亜空間の中で、《彼女》がどんなふうであったのか、それさえもあとからはもう高にはいうことができなかったろう。赤が黄と、黄がオレンジと、灰色が青と入れかわり、とけこんでゆく世界、かりそめの次元で、《彼女》は真赤な髪とあざやかなマリンブルーの肌、金色の目をした背のたかい女に見えたかと思うと、次の刹那、紫の肌と赤い瞳、素晴らしいブラチナ・ブロンドの髪、次にはすべてが黄色一色のネガ・フィルムのなかの女のようにかわってしまうのだった。《彼女》がはたしてさだまった姿、かたちをもっているのかさえ、

高にはわからず、それでありながら、それが《彼女》である、ということだけが、いたいほど強く感じとられた。《彼女》はそれほどまなましくたしかな存在としてそこにいた。それは高に手をさしのべていた。《彼女》のあらわれた混乱したかたちではなく、《彼女》の存在そのものを、高は、まるで《彼女》に肌と肌をすりよせ、《彼女》のなかにあるようになまましく感じた。

《彼女》に答えない、と高はばらばらに分解してピンクの海へおちてゆくような感覚の中で激しく願っていた。《彼女》が何かしら訴えかけるように、高の応えるのを待ちのぞんで手をさしのべていることが、彼にはわかっていた。応えなくては、と彼は魂のすべてをあげて願っていた。だが、どうやって、何といて、かれが桜井高がここにおいて、彼女を見、感じている、ということ伝えたらいいのだろうか？ 《彼女》に、何と呼びかければいいのだろうか？

《彼女》の髪はオレンジから紫へ、紫からすきとおったエメラルドへ、一瞬ごとに色あいを変えた。それにつれて《彼女》のいざなうような、哀しげな微笑もまたクレムリンからコバルト、コバルトから漆黒へと色を変えた。

《ほくはここにいる》

高の咽喉もとにまで、叫びがふくれあがってきた。高は眠りの中とわかっていて夢からさめられない人のようにもがいた。そしてついにその声は高の咽喉をなかばひきさくようにおのづからほとばしり出た。

ローレライ！

《彼女》がたしかにじぶんにその金色の目をむけた、と高は思った。次の一瞬、星々は逆流し、巨